様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月２４日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2010
課題番号：２１７３０１４５
研究課題名（和文）　中東域内における諸国家間の関係調整メカニズムに関する実証的研究
研究課題名（英文）　Patterns and Dynamism of the Interstate Rapprochement in the Middle East
研究代表者
末近　浩太（SUECHIKA KOTA）
立命館大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：７０４３４７０１

研究成果の概要（和文）：
本研究は、今日の中東域内で展開されている対話・交渉・仲介の実証的分析を通して、同地域における安全保障をめぐる国家間の関係調整メカニズムを調査･研究することを目的とした。中東の国際関係を主権国家間の関係としてみれば、他の地域と同様に国益にしたがったリアリズム的言動が顕著である。しかしそれと同時に、アラブやイスラームといったアイデンティティや「大義」による外交が展開されているのも事実であり、また、社会運動や財団といった非国家主体を通した国家間関係の「多チャンネル化」も進んでいる。中東の国際関係は、国家主体によるリアリズムだけではなく、アイデンティティやアジェンダをベースにした非国家主体の営為によって一定の安定が担保されていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
The aim of this research project is to explore patterns and dynamism of the interstate rapprochement in the Middle East through empirical analysis about dialogue, negotiation and mediation among the state and non-state actors. Although the international relations of the region, as the sovereign state system, can be understood to some extent in the context of the IR realism, it should not be ignored that it has been deeply affected by the identity factors such as being Arab and/or Muslim. Furthermore, the foreign policies of the Middle Eastern states are characterized by not only dynamics of the state actors, but also of non-state actors whose alignments are based on policy agendas as well as identities. Stability of the region seems to be secured by such a series of efforts of the state and non-state actors for rapprochement.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：国際関係論
科研費の分科・細目：政治学・国際関係論
キーワード：中東、イスラーム、安全保障

１．研究開始当初の背景
中東は世界で最も不安定な地域の１つである。中東における武力紛争は第２次大戦後から今日までに 25 以上を数え、政治勢力間の信頼醸成は未だ発展途上である。経済的に見ても、欧州や東南アジアがリージョナリズム

を涵養してきたのに対し、同地域では地域統合はおろか地域協力も遅々として進んでおらず、国家間の相互依存関係も希薄であると指摘されてきた。

その一方で、中東では絶え間なき交渉・対話・仲介による、安全保障をめぐる国家間の調整機能が働いてきたのも事実である。その証左として、域内での国家間戦争は、①中東戦争と②イラクによる戦争の2パターンのみである。

このような調整機能には、無数のバイラテラルな外交関係に加えて、地域機構やアイデンティティに依拠したユニラテラルなフォーラム（例えば、アラブ連盟、GCC（湾岸協力会議）、OIC（イスラーム諸国会議機構）も含まれる。

しかしながら、研究者のみならず政策決定者までもが、長らくこの調整機能を看過ないしは過小評価してきた。その一因として、既に起こった紛争という「結果」からその無効性や限界性を論じることに終始してきたことが指摘できよう。だが実際には、この中東諸国家間の域内外交によって回避・縮小された紛争も少なくない

２．研究の目的

本研究の目的は、今日の中東域内で展開されている対話・交渉・仲介の実証的分析を通して、同地域における安全保障をめぐる国家間の関係調整メカニズムを調査・研究することである。具体的には次の2つとなる。

① 2000年以降の中東域内で展開されてきた国家および非国家アクターを含む諸関係（対話・交渉・仲介）の実態を把握すること。
② この諸関係が、中東地域の安定および不安定にいかなる作用を及ぼしているのか分析・解明すること。

３．研究の方法

①中東諸国の外交関係の網羅的把握（2000年～）：中東諸国で頻繁に行われている要人の往来と首脳会議等について、報道資料とマスメディアの分析を通して時系列順に網羅的に把握した。
②中東諸国家間の関係密度の測定：アクター間の関係密度についての量的測定を行った。一般的に良好ではないと見られている国家間関係でも、実際には多くの対話や交渉が行われている。その結果も重要であるが、まずはどれほどの対話・交渉・仲介が行われているのかを把握に務めた。
③外交関係の分類・整理とデータベース作成：①②のデータに基づき、中東諸国の外交関係を分類・整理した。
④アジェンダをベースとした中東諸国の外交関係パターンの析出：(a) パレスチナ問題と (b) 中東の外部のアクターの介入という2つのアジェンダを設定し、これらに関わる中東域内の国家・非国家の動向を分析した。
⑤国家間関係調整メカニズムのモデル化：以上の作業を手がかりに、中東域内における危機の回避・縮小・沈静化のために、中東諸国がいかなる論理で行動し、いかなる傾向を有した外交を展開してきたのかを把握し、安全保障をめぐる関係調整のメカニズムのあり方を検討した。
⑥IRの理論とのすり合わせ：中東の事例がIRに対してどのような意味を持つのか、また翻って、IRで中東はどこまで分析できるのか検討した。

４．研究成果

①中東諸国の「高密度」の外交関係：中東域内の政治問題をめぐって、高い頻度で各国の要人が往来し解決に向けての政策を議論していることが明らかになった。本研究では、とりわけ東アラブ諸国（シリア、レバノン、パレスチナ／イスラエル、ヨルダン、イラク）に焦点を当てて分析を進めたが、レバノンやイラクの内政問題（治安悪化や組閣の遅延）や中東和平問題に取り組むべく、外相レベルの会合や非公式な調整が行われている。
②シリアの存在感：①のような関係調整メカニズムにおいて、特に強いイニシャティブを発揮しているのがシリアである。シリア外交の基本戦略は東アラブにおけるイスラエルとの覇権争いというリアリズムに基づいており、そのため地域の安定よりも不安定の要因と見なされがちであった。しかし実際には、レバノンやイラクの国家機能が停滞・膠着した際にそれぞれの国内の政治勢力の権力分有を準備するというパワーブローカーとしての役割を果たしている。そして、こうした東アラブ諸国の安定への「貢献」が、翻ってシリアのバアス党政権の存続に一定の正当性を与える結果となっている。
③非国家主体による信頼醸成：国家間の関係調整メカニズムが機能する上で、国家だけではなく非国家主体が大きな役割を果たしている。例えば、シーア派アイデンティティに基づく国境を越えたネットワークを通して、中東各国のあいだを人・モノ・カネ・情報の伝達が行われている。レバノンの法学者ファドルッラー師の財団やイランによるヒズブッラー支援などが挙げられるが、それは本研

究が対象とする 2000 年代だけではなく、それ以前から面々と受け継がれてきたことが明らかになった。
④トルコとカタルによる「仲介外交戦略」の萌芽：近年、トルコとカタルが「仲介者」として中東における国家間の関係調整メカニズムを積極的に担いつつある。トルコは地政学上の位置から欧米と中東を橋渡しする存在になろうとしている。カタルは豊富な天然資源を背景にした巨大な資金力を駆使して、中東地域での発言力を高めようとしている。トルコは非アラブであること、カタルは小国であることという弱みがあるが、両国とも強い政治色を打ち出さず、むしろそれを武器として「仲介者」となることで存在感を高めている。
⑤IR 理論へのインプリケーション：非国家主体のダイナミズムを通した国家間関係の緊密化という意味において、これまで中東地域でほとんど見ることができなかったリベラリズム的な要素が現出しつつあるといえる。しかし、それは国家間の相互依存の進展というよりは、アラブやイスラームといったアイデンティティ、あるいはシーア派ネットワークといった伝統的な紐帯をもとに機能しているように思われ、その点で従来の IR 理論との齟齬があるかと思われる。さらなる実証研究を積み重ねることを通して、今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
①末近浩太「巨星墜つ、ファドルッラー師逝去」『季刊アラブ』第 134 号，2010 年秋，pp. 26-27.査読無.
②末近浩太「抵抗と革命をむすぶもの（2）：イスラーム思想史のなかのレバノン・ヒズブッラー」『立命館国際研究』第 22 巻，第 3 号，2010 年 3 月，pp. 93-131.査読無.
③末近浩太「抵抗と革命をむすぶもの（1）：レバノン・ヒズブッラーの誕生（1982～85 年）」『立命館国際研究』第 22 巻，第 2 号，2009 年 10 月，pp. 101-136.査読無.

〔学会発表〕（計 3 件）
①末近浩太“If Not Authoritarianism nor Democracy, then What?: Lebanese Power-sharing Arrangements after the 2005 Independence *intifada*,” IAS Third International Conference “New Horizons in Islamic Area Studies: Continuity, Contestations and the Future,” Kyoto International Conference Center, Kyoto, JAPAN, December 19, 2010.
②末近浩太“Changing and Unchanging Face of Post-Syria Lebanese Politics: Power-sharing Arrangements, National Integration, and International Relations,” Panel “Transformation from Politics based on Communal Identities to Cross-communal National Parties through Electoral System: Cases of Iraq and Lebanon,” World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES), The European Institute of the Mediterranean (IEMed) and the Universitat Autònoma de Barcelona (UAB), Barcelona, SPAIN, July 21, 2010.
③末近浩太“Redefining Resistance: Hizballah's Public Services and 'Mujtama' al-Muqawama,” IAS Second International Conference “New Horizons in Islamic Area Studies: Identities, Coexistence and Globalization,” Marriott Hotel Cairo, Cairo, EGYPT, December 11-12, 2009.

〔図書〕（計 2 件）
①末近浩太“Arab Nationalism Twisted?: The Syrian Ba'th Regime's Strategies for Nation/State-building,” Yusuke Murakami, Hiroyuki Yamamoto and Hiromi Komori (eds.), Enduring States: In the Face of Challenges from Within and Without. Kyoto: Kyoto University Press, 2011, pp. 84-98.
②末近浩太「中東におけるリージョナリズム」篠田武司・西口清勝・松下冽編著『グローバル化とリージョナリズム』（シリーズグローバル化の現代：現状と課題　第Ⅰ巻）御茶ノ水書房，2009 年，pp. 299-325.

〔その他〕
①末近浩太「ヒズボラ：『抵抗社会』の団結力」（中東レポート）「Asahi 中東マガジン」朝日新聞社，2011 年 1 月 18 日.
②末近浩太「ヒズボラのゼネコン、『ワアド』による戦後復興」Asahi 中東マガジン」朝日新聞社，2011 年 4 月 15 日.
③翻訳：ダン・コンシャーボク，ダウド・アラミー（臼杵陽監訳）『双方の視点から描くパレスチナ／イスラエル紛争史』岩波書店，2011 年（第 4，5，6 章担当）.
④末近浩太「ヒズボラはなぜ戦い続けるのか」（中東レポート）「Asahi 中東マガジン」

朝日新聞社，2010 年 11 月 29 日.
⑤末近浩太「中東地域のポスト紛争国における SSR：イラクとレバノン」立命館グローバル・イノベーション研究機構（R-GIRO）研究プログラム「新しい平和学にむけた学際的研究拠点の形成：ポスト紛争地域における和解志向ガバナンスと持続可能な平和構築の研究」公開シンポジウム「新しい平和学のパラダイム構築を目指して：ポスト紛争国と民主化移行国における治安部門の再建課題と国際協力の展望」(2010 年 11 月 5 日　立命館大学）.
⑥末近浩太「もう一つの『国家の殻』：非公的主体のシリア・レバノン政治」科学研究費補助金基盤研究 B「現代東アラブ地域の政治主体に関する包括的研究：非公的政治空間における営為を中心に」との合同研究会（2009 年 8 月 5 日　ダマスカス・ウマイヤホテル）.

６．研究組織
(1)研究代表者
末近　浩太（SUECHIKA KOTA）
立命館大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：70434701